

## 「高田富士」以前に存在した静岡県内の富士塚

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 大高 康正〉

富士塚については、『日本国語大辞典』第2版に「富士塚」項が設けられています。そこには、「近世の民間信仰遺跡の一つ。富士信仰の講中により造営された富士山の形を模した塚。特に文化・文政期(1804~30)以降に盛行した。」と説明されています。

この内容は、江戸時代の18世紀以降に関東地方を中心に爆発的に流行した長谷川角行を教義上の開祖とする富士山信仰の集団、富士講による造作を念頭に置いた記述とすることができます。

こうした角行を開祖とする系統の富士講についての先駆的な研究書である岩科小一郎氏の『富士講の研究』では、富士塚について「最初に富士塚を建立したのは、身禄みろくの弟子日行青山にちぎょうせいざんと高田藤四郎とうしろうである。明和2年(1765)に、身禄の三十三回忌の法要がおこなわれたとき、藤四郎は江戸の地に恩師のモニュメントを築造したいと発願した。(中略)自分の住む戸塚村(新宿区高田)の水稲荷社の境内にある小山(古墳)を改造し、富士山を作ることを思い立った。」と記しています。富士塚とは、富士講の行者である食行身禄じきぎょうみろくの三十三回忌に弟子の高田藤四郎が発願したものであること、また築造に当たっては、それ以前から存在した古墳などの小山を利用していたこと、また高田藤四郎が植木屋を営んでいたことにも注目できるかと思えます。

高田藤四郎が築造したこの富士塚は「高田富士」と呼ばれ評判となったようで、関東地方の他の富士講においても同様に造作されていきました。こうしたこともあり、富士塚というこの「高田富士」が発祥であると説明されることは多いと思えます。ただ、岩科氏の『富士講の研究』においても、「小山の上に浅間大神かみじょうを勧請して“富士塚”と呼ぶ習俗は、古く鎌倉時代からあった。」と述べられており、あくまでも富士塚そのものを「高田富士」が発祥であるとはしていません。

岩科氏の著書では、こういった中世の鎌倉時代から既にあったとする富士塚について、「しかしこれは富士山の写しではない。山の上に浅間の祠ほくらまつを祀ったというだけの姿である。」ととらえています。これは「高田富士」について、「老若男女が江戸にいて“富士詣で”の真似ごとのできるようにしてやろう。それには可能な限り現地の形をと、ジグザクの登山道おちゅうどうどう、御中道の周回路、五合こみたけしゃ おたない小御嶽社、御胎内の洞穴まで作り、山腹えぼしに烏帽子形の巨岩を置き、これを身禄しゅうえんの終焉の地烏帽子岩に見立て、亡き師の記念碑としたのである。」と評価したことが背景にあるようです。

岩科氏が述べている「高田富士」以前の鎌倉時代からあったとする富士塚については、残念ながら具体的にどこのどういったものを念頭にしたかは述べられていませんが、「高田富士」はあくまでも富士塚の完成された姿として評価できるものであり、塚に祀って祭祀さいしをするという発想自体は、この時生まれたというものではないということは指摘できるでしょう。

また、富士山に関する自然及び文化の様々な事柄から100のテーマを抜粋した2012年刊行の『富士山を知る事典』の「富士塚」項では、高田富士に関わる富士塚の定説的な理解の説明に加えて、「富士講による築造以前から、塚上に浅間社を勧請するなどした「富士塚」も存在した。



その起源は中世に<sup>さかのぼ</sup>遡るものと見られ、東京都文京区の<sup>こまごめ</sup>駒込富士・静岡県富士市<sup>すずかわ</sup>鈴川の富士塚は、近世初頭の記録がある。」として、中世に遡る角行系の富士講以外の集団による造作事例について触れられています。

この部分の項目をまとめた荻野裕子氏は、「富士講以外の富士塚—静岡県を事例として—」と題した別稿をまとめており、そこでは富士市鈴川の富士塚(現存、写真1)、静岡市清水区興津の富士塚(消滅)、焼津市下江留の御山塚(消滅)、焼津市上小杉の富士塚(消滅)、浜松市中区浅田町の富士塚(消滅)、浜松市中区砂山町の富士塚(消滅)、浜松市東区有玉西町の富士塚(消滅)といった事例を紹介されています。



写真1 鈴川の富士塚(富士市鈴川)

これらの富士塚も、各地域で富士山になぞらえて信仰されていたものと思われますが、荻野氏が「富士講以外の富士塚」として紹介している意図も、角行系の富士講で築造されたものではない、というニュアンスを含むものととらえられます。本来、講そのものは共通の信仰のもとに集まった集団であり、角行系の富士講以外の富士山信仰をもっていた集団も、富士講と称していた場合は多いのです。こうしたことから、駿河国より西側の西国方面で広まっていた富士山信仰の影響を受けて育まれた富士塚は、「高田富士」の築造以前に遡ることが確認できるものも含まれていますし、総じて関東地方で角行系の富士講が爆発的に流行する以前から、これとは異なる富士講の集団により育まれたものであったと考えることができます。

ただ、荻野氏の論考で紹介された「富士講以外の富士塚」においても、現在確認することのできる富士塚は、鈴川の富士塚のみでした。この富士塚について触れた記録として、享保18年(1733)の年記をもつ『<sup>たご</sup>田子の<sup>ふるみち</sup>古道』があります。同書には、「<sup>ともがら</sup>いづれの頃より富士参りの輩、浜下りして、石壺つずつ荷い上げ、この山へ登りて、<sup>ぜんじょう</sup>富士禅定の軽からん事を頼み、これにより富士塚とはいうなり」と記しています。「高田富士」が築造された明和2年(1765)よりも前の時期に、富士山への登山参詣を行う際の習俗として、田子の浦の海岸から石を拾い、道中の安全を祈願して、この富士塚に登っていたこととなります。おそらく、浜で拾った石は富士塚に供えたものと思われる。

現状の鈴川の富士塚は、調査報告書『鈴川の富士塚』で詳しく報告されていますが、内部に砂山があって、その上から敷石をコンクリートで固めた状態にしています。写真2の絵葉書「<sup>あまのかくやま</sup>天之香具山ノ富士」は、鈴川の富士塚の近代初期の姿を写したものと考えられ、右端の砂山が該当します。絵葉書のキャプションには「Mt.Fuji & Amanokakuyama, Miho」と書かれていますが、富士山の景観から三保松原ではなく鈴川近辺を写したものと思われる。この砂山に注目すると、浜から拾いあげてきたような石がたくさん積まれた姿を確認することができます。



写真2 絵葉書「天之香具山ノ富士」

#### 【参考文献】

- ・岩科小一郎『富士講の歴史』（名著出版、1983年）。
- ・荻野裕子「富士講以外の富士塚—静岡県を事例として—」（『民具マンスリー』第38巻10号、2006年）。
- ・『田子の古道』（富士市立中央図書館、2007年）。
- ・『鈴川の富士塚』（富士市教育委員会、2018年）。

